

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月11日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01662

研究課題名(和文) 英連邦競技会をめぐる言説にみる地域主義、ナショナリズム、帝国意識に関する史的研究

研究課題名(英文) Historical Research on Representation and Discourse of Region, Nation, and the Empire in the British Empire/Commonwealth Games

研究代表者

川本 真浩 (Kawamoto, Masahiro)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・准教授

研究者番号：20314338

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英連邦競技会(エンパイア・ゲームズから3たび改称して現在はコモンウェルス・ゲームズ)をめぐる言説や表象に着目し、そこに映しだされる地域社会、ネイション、帝国ないしコモンウェルスにかかる重層的な帰属意識やスポーツ文化をとおした社会的枠組みの特質について考察した。1930年代から50年代にかけてのニュージーランド、カーディフ大会(1958年)を開催したころのウェールズ、1980年代初めまでのオーストラリアに焦点を合わせ、地域主義、ナショナリズム、帝国意識が交錯するなかで開催されてきた英連邦競技会の歴史的位相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ウェストミンスター憲章により創設されたコモンウェルスの加盟国に加えて、本国イギリスの4ネーションと海外諸領がそれぞれ選手を派遣する総合スポーツ大会である英連邦競技会は、国際組織であるコモンウェルスよりもイギリス帝国を表象的に継承し体現するイベントであり、その歴史から見通せる重層的な帰属意識やスポーツ文化のありようを明らかにしたことは、帝国=コモンウェルス史ないしスポーツ史研究の成果というのみならず、激動する現代世界情勢を考える際に看過されがちなコモンウェルスに注目し捉え直す手がかりを提供するものとして社会的意義を有する。

研究成果の概要(英文)：This research looks into the multilayered framework of sporting culture and collective identities relating to regional society, nation, and empire/Commonwealth by examining the British Empire/Commonwealth Games mainly from its inauguration to the 1980s, its discourse and representations. Focusing on the conditions and attitudes toward the Games in New Zealand between 1930s and 1950s, the representation and discourses in Wales when it held the Games (1958) in Cardiff, and the representations in the Games(1982) held in Brisbane, Australia, the research reveals the distinctiveness of the Games, intertwined with locality and regionalism, nationalism, and imperial consciousness, both in sports history and in the 20th-century British imperial/Commonwealth history.

研究分野：イギリス帝国=コモンウェルス史、スポーツ史

キーワード：スポーツ史 ナショナリズム 国際関係 帝国史 地域主義 コモンウェルス イギリス現代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英連邦競技会(エンパイア・ゲームズ/のち三たび改称して現在はコモンウェルス・ゲームズ)の歴史にかかる研究は、かつてC・ムーアがひとつの画期をなしたが、21世紀に入ってM・ドーソンによる論稿をはじめとする第5回大会(1954年)に関する研究やD・ゴーマンによる第1回大会(1930年)に関する論稿など、ふたたび活況を呈している。その背景には、『スポーツ史国際ジャーナル *The International Journal of the History of Sport*』収載の論稿や特集号にみられるような、スポーツ史学界でのグローバル化とスポーツとの歴史的関係への注目の高まりという、大きな学界の潮流もある。日本でも、スポーツと帝国・帝国意識・帝国主義との歴史的関係を扱った研究やその紹介は継続的に展開されてきた。いっぽう、英連邦競技会に関しては、いまだ学術的な考察や議論の対象となっていない部分も多かった。1950年代から80年代にかけて開催された同競技会に関していえば、「神話化」された第5回大会を除けば、さほど関心を惹きつけてこなかった。

そうした先行研究の状況をふまえて、帝国=コモンウェルス史の視角から1970年代の反アパルトヘイト国際キャンペーンと英連邦競技会開催との関わりについて小論をものした本研究代表者がその研究をさらに展開させる必要性を認識したのが、本研究の開始当初の背景である。

<参考文献>

1. M・ポリー(池田恵子訳)「スポーツと帝国・外交 19世紀及び20世紀における英国のインターナショナルなスポーツ」『西洋史学』255号、2014年。
2. 石井昌幸「フィールドのオリエンタリズム-K・S・ランジットシンとわれわれの帝国」有賀郁敏他著『スポーツ』ミネルヴァ書房、2002年、所収。
3. 小川浩之『英連邦』中央公論新社、2012年。
4. A・グットマン(谷川稔他訳)『スポーツと帝国』昭和堂、1997年。
5. 川本真浩「20世紀中葉のコモンウェルス・ゲームズと国際秩序 スポーツ界につくられた「もうひとつのコモンウェルス」」山本正・細川道久編著『コモンウェルスとは何か ポスト帝国時代のソフトパワー』ミネルヴァ書房、2014年、所収。
6. MacDonald, J., and Hall, M.A., 'Remembering "The Forgotten Games": A Reinterpretation of the 1954 British Empire and Commonwealth Games', *Sport History Review*, 40(2)(2009).
7. Dawson, M., 'Acting global, thinking local: "Liquid imperialism" and the multiple meanings of the 1954 British Empire & Commonwealth Games', *International Journal of the History of Sport*, 23(1)(2006).
8. Gorman, D., 'Amateurism, Imperialism, Internationalism and the First British Empire Games', *International Journal of the History of Sport*, 27(4)(2010).
9. Moore, K., "The warmth of comradeship": the first British empire games and imperial solidarity', *International Journal of the History of Sport*, 6(2)(1989).
10. Shaw, T.M., *Commonwealth: Inter- and non-state contributions to global governance*, Abingdon, 2008.

2. 研究の目的

本研究では、1930年代から80年代の帝国=コモンウェルス史およびスポーツ史のなかで独

特の特性を帯びたグローバルな総合スポーツ大会として開催されていた英連邦競技会（エンパイア・ゲームズ/コモンウェルス・ゲームズ）に着目する。とくに 1950 年代から 80 年代にかけての同競技会をめぐる言説ないし表象をとおして、地域主義、ナショナリズム、帝国意識という、それぞれ異なる空間に接する意識と思考が交錯するなかで開催されつづけていた同競技会の歴史的位相をあぶりだすと同時に、本国、ドミニオン、新興独立国、その他のイギリス海外領によってグローバルなスポーツの世界に形づくられた「もうひとつのコモンウェルス」の実相を明らかにすることを本研究の目的とする。

3. 研究の方法

本研究はもっぱら文献資料を用いてデータの集成、整理、分析、考察をおこなう歴史学の手法ですすめた。使用した文献のうち、日本で入手できたのは、帝国=コモンウェルス史、近代スポーツ史、当該時期の各国政治・社会・経済に関する書籍及び論考のほか、オーストラリア及びニュージーランドの各国立図書館が一般公開しているデータベースからダウンロードできる新聞記事である。そのほか、ニュージーランド、オーストラリア、イギリスでの現地調査によって、ニュージーランド国立図書館ウェリントン館が所蔵するNZオリンピック・帝国競技会協会をはじめとする国内競技団体の文書ならびに競技関係者の書簡集、カーディフ（イギリス）にあるキャセイズ図書館が所蔵する第6回大会（1958年）関係資料、さらにクライストチャーチ及びオークランド（ニュージーランド）、プリズベン及びゴールドコースト（オーストラリア）、ロンドン（イギリス）にある図書館及び大会関係施設が有する史資料を入手した。

これらの史資料のなかには先行研究でとりあげられていないものも多く、まずは収集した史資料の全般的な状況を確認したうえで、研究の目的に適うように考察対象をしばらくこんでいく作業をおこなった。その結果、1950年代以前を含むニュージーランドの大会参加にかかる国内団体の動向と第6回大会開催にかかるウェールズでの状況に焦点を合わせつつ、1980年代初めまでのオーストラリアの大会へのアプローチも論点に加えることで、本研究が目指す成果にもっとも適うものと判断した。

また、本研究での考察を補強する研究対象として、ローンボウルズの来歴と本国及びコモンウェルス諸国における受容と展開の様子にも注目した。とくにローンボウルズに着目した理由は、英連邦競技会参加国以外では他のグローバル・スポーツほどに知名度が高くない点でコモンウェルス中心のグローバル・スポーツという特徴をもつこと、第8回大会（1966年）を除いて第1回大会から一貫して正式競技としておこなわれていること、競技スポーツであると同時に地域社会に根ざした歴史をもつ社交スポーツのひとつでもあることなどである。とくに、地域社会と帝国=コモンウェルスを結びつける文化事象のひとつとみなすことができる点が本研究の主題に深く関わると考えた。

4. 研究成果

本研究では、1930年代から80年代にかけての英連邦競技会をたどるなかで、とくに1930年代後半～50年代のニュージーランドとウェールズと1980年代のオーストラリアに焦点を合わせ、地域社会、ネイション、帝国にかかる意識やその表象について考察した。また、この競技会の特性の一端を映し出す実施競技のひとつローンボウルズの歴史的経緯とイベントでの独自の位置取りについても考察した。

（1）ニュージーランドでは、選手派遣にかかる財政的問題など困難を抱えながらも、競

技団体がオリンピックと同等の意義を大会参加に見出していた。エンパイア・ゲームズが継続して4年ごとに開催される方向で旧コモンウェルス諸国の競技関係者が一致しつつあった1930年代前半、ニュージーランドはオリンピック開催の直前または会期中にエンパイア・ゲームズを開催することを主張していた。オリンピックとは異なる「帝国」スポーツイベントには賛同しながらも、開催国からの補助金では賄いきれない選手団派遣費用の調達に苦労していたという背景がある。同国にとって幸運だったのは、第3回大会(1938年)がもっとも近いドミニオンであったオーストラリア(シドニー)で開催されたことと、第2次世界大戦後に再開された最初のエンパイア・ゲームズの招致に成功してオークランドで第4回大会(1950年)を開催できたことであった。しかもこの大会開催はニュージーランド・オリンピック英帝国競技会協会(NZOBEGA)に2万ポンドを超える収益をもたらす。その収益による基金の一部(7000ポンド)のおかげもあって、太平洋をへだてたバンクーバー(カナダ)で開催された第5回大会に、タスマン海を隔てただけのシドニーで開催された第2回大会(1934年)に匹敵する規模の選手団を送り込むことができた。この時期の帝国=コモンウェルス体制の変容を背景にしながら、British Empire GamesからBritish Empire and Commonwealth Gamesと改称し、「親善競技会 Friendly Games」としてイメージ刷新を図った第5回大会への堅実な参加姿勢は、スポーツ界の「コモンウェルス」におけるニュージーランドのプレゼンスを誇示する上で意義深いことであった。また、その4年後のカーディフ(イギリス)で開催された第6回大会には、さらに遠方であるにもかかわらず、第5回大会よりも多くの代表選手を派遣した。

英連邦競技会に対するコミットメントを強く意識したスタンスをNZOBEGAがとっていたことは、同競技会やオリンピックの実施競技を統括する加盟団体と実施競技ではないスポーツを統括する加盟団体との間の懸隔を懸念する意見があったことから推察できる。それがもたらす財務的な不公平感という限定的な事項に関わるものであったとしても、海外派遣費用が莫大でその調達が重要視されるニュージーランドにとっては、国内スポーツ・コミュニティのありかたを揺るがしかねない問題であった。

また、以上のようなニュージーランドの英連邦競技会に対するスタンスは、先行研究でも明らかにされた第4回大会にかかる言説や表象とも符合する。そこにみいだせる「帝国の外形を引き継ぐ新コモンウェルスのなかにニュージーランドを位置づける」図式は、スポーツとその報道という媒体によって、新たなコモンウェルスへの意識と自立した国家を統合するナショナリズムという複合的なメンタリティをより多くの人々に共有させる機会を提供するところともなった。

(2) ニュージーランドが積極的に参画した第6回大会は、開催地である都市カーディフひいては同ネーションであるウェールズにとっても、重要な大会であった。のちに「国内辺境」と解されることにもなるウェールズにとって、帝国=コモンウェルスの文脈においてまぎれもなく「本国」を構成するネーションのひとつであることを自己アピールする好機ととらえられたのである。大会開催の機運を盛り上げるためにウェールズ・英帝国競技会評議会が作成した冊子(*The story of the British Empire Games : bring the Empire Games to Wales - an appeal*, British Empire Games Council for Wales, n/a)には「エンパイア・ゲームズが単一のネーションたるウェールズが参加する唯一の総合国際イベントであることはつねに認識されているわけではないし、だからこそ我が国の威厳と名誉を誇示するに値するチームを派遣することを当評議会はつねに意図している」とある。同冊子に掲載された「アピール」は、第4回大会がコモンウェルスの小国ニュージーランドで開

催され、オリンピックも小国フィンランドで成功した(1952年に開催されたヘルシンキ五輪を指す)のだから「我々みな助けあえばウェールズにもできる」と訴えた。

エリザベス2世の即位から6年後に本国で開催されたこの大会は、女王の開会式メッセージをバトン型容器に入れてオリンピックの聖火リレーのごとく運ぶ「クイーンズ・バトン・リレー」が初めて実施された大会でもあった。また、体調不良により閉会式にも出席しなかったエリザベス2世の閉会式スピーチ(録音音声)のなかで王子チャールズへのウェールズ公叙爵が告げられたことも、帝国=コモンウェルスの文脈のなかにウェールズ・ナショナリズムを落とし込もうとする演出であったといえよう。いっぽう、この大会開催をウェールズへの旅行者誘致の契機にしようとする開催関係者の思惑のなかで集客ターゲットとして欧米各国が重視されていたことは興味深い。たとえば開会前に発行された来訪者向けブックレットにはイギリスの通貨単位(多くの近隣諸国と異なり、10進法ではなかった)の紹介とともに、大陸ヨーロッパ諸国(フランス、ベルギー、スイス、オランダ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、ドイツ)と北米(アメリカ合衆国とカナダ)の通貨との為替比率が示されていた。じつのところ、ウェールズ各地ではコンサートなどの文化行事が英連邦競技会の会期にあわせておこなわれていた。スポーツ大会にとどまらない複合的なイベント期間に地理的に近いヨーロッパ諸国から来るであろう多くの観光客を見込んでいたことは、帝国=コモンウェルスのスポーツ行事を流用する巧みな発想である。

(3) このように本国から距離的に遠く新コモンウェルス諸国の隆盛に存在感の危機を意識しかねない位置にあった旧白人自治領や本国の周縁部に置かれたネーションをも巧みに取り込んだかにみえた英連邦競技会は、しかしながら、1960年代から80年代にかけても、コモンウェルス諸国内外のリアル・ポリティークと無関係ではありえなかった。アパルトヘイト体制を強化し続けた南アフリカそのものをコモンウェルスから排除したあとも、反アパルトヘイト国際キャンペーンの一環としてのさまざまなレベルでの運動は、スポーツ界からの南アフリカ排除、そして南アフリカとスポーツ交流する国々への政治的圧力を強める流れにつながっていた。そうした国際社会の動きのなか、80年代初めにオーストラリアで開催された英連邦競技会でも、白豪主義から脱却した後の先住民や移民をとりこんだ国家形成のなかで依然として未解決の問題が浮き彫りになった。プリズベンで開催された第12回大会(1982年)は、スポーツ施設の整備とともに公的基盤施設の整備や公共交通の改良を推し進めたいっぽう、アボリジナル及びトレス海峡諸島民に対する差別や不当な扱いを正し、自決権や土地権利を追求し回復する運動が勢いをえる契機となった。プリズベンで大々的に展開された示威行動に対してクイーンズランド州政府が強圧的な対応策を採ったことも、先住民問題の深刻さを国内外に大きく知らしめる結果につながった。プリズベンで繰り広げられた「親善競技会 Friendly Games」と先住民問題にかかる一連のキャンペーンからは、地域、「ネーション」、コモンウェルス(英連邦)の結びつきが綻んでいることを「もうひとつのコモンウェルス」を体現するスポーツイベントが露わにしたことがわかる。

(4) 英連邦競技会の特性を映し出す点で異彩を放つ実施競技のひとつがローンボウルズである。第8回大会を除くすべての大会で正式競技として実施されているが、当初からそのような安定した位置づけであったわけではない。1930年代後半にはローンボウルズを実施競技から外す方向での議論が繰り返された。その後、国際競技団体のあとおしもあり、結果的には継続して実施されたものの、他競技との懸隔は当面残った。たとえば、第5回大会にニュージーランドから出場したローンボウルズ選手団は、旅程や滞在宿舎を他競

技選手と別にして自費参加した。それが可能であったというローンボウルズ競技（者ないし統括団体）の社会的特性も看過できない。つまりローンボウルズは、コモンウェルス中心の擬似グローバル・スポーツであり、競技スポーツであると同時に、地域社会のエリート層ないしその特権的意識と社会的地位を背景にもつ社交スポーツでもあった。同競技会の実施競技でありながら、他の実施競技あるいは同イベント総体とさえ別の次元で、地域社会、コモンウェルス構成国、そして帝国＝コモンウェルスを結びつけていた媒体のひとつだったと考えられる。その意味において、帝国＝コモンウェルスないし英連邦競技会におけるローンボウルズは、地域社会と帝国＝コモンウェルスを結びつける独特の文化事象のひとつとみなすことができるだろう。

（結論）この研究が対象とした時期すなわち帝国＝コモンウェルス体制や本国内ナショナリズムが大きく変貌する時期をとおして4年ごとに開催され続けた英連邦競技会は、政治とは異なる次元で「もうひとつのコモンウェルス」を構築し維持し続けた。政治とスポーツを単純に二分法的にとらえることは適切ではなく、両者の関係は入り組んでいるが、他方で両者の間にある一定の距離感が相互参照ないし流用を積み重ねてきたという歴史がある。そして、コモンウェルス内外の諸情勢に影響されながら、地域主義、ナショナリズム、帝国意識（ないし「コモンウェルス」意識）が織りなす模様も変化していったことも確認できた。

研究期間全体にかかる成果は、当初の見込みと完全に一致するものではなかったものの、地域主義、ナショナリズム、帝国意識が交錯するなかで開催されてきた英連邦競技会の歴史的位相をあぶりだしながら、さらにその複雑さを解明するための手がかりを得た点で、所期の目的に匹敵する研究成果をえることができた。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

川本真浩「ローンボウルズの「来歴」再考」『海南史学』査読あり 55(2017)。29-52 頁。

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。